石川県七尾美術館開館 10周年・新七尾市誕生記念

国宝・松林図屏風

「松林図屏風」東京国立博物館蔵
国宝　安土桃山時代（16世紀）　紙本墨画
6曲1双　各縦156.8㎝×横356㎝

右隻の右側2扇分を上にずらして紙継ぎを合わせ、左隻も右側の3扇を上にずらしてみると、食い違っていた地面の盛り上がりの線がつながってきます。これが制作当時の姿で、元々は屏風ではなく障壁画であったとする説を提唱される研究者もいます。

謎4 本画か草稿（下絵）か？

元は障壁画ではなかったかとする説が提唱される中で、「いや、あの絵は元から屏風として考えられたもの。ただし、本画ではなくて草稿と考えられる。」とする研究者も出てきました。確かに、草稿とすれば紙継ぎのズレも有り得るわけで、近くで見ると驚くほど荒い筆遣いで描かれているのも頷けます。

しかし、一方では「この絵の墨は、非常にいいものを使っている。とても草稿とは思えない。」とする見方もあるのです。

謎5 真実はどこ？

「屏風か障壁画か」「本画か草稿か」については、「あれは、誰かのために描いたものではなく、等伯自身の極めて私的な絵。」という、出光美術館の学芸課長・黒田泰三氏の見解も魅力的です。

もし障壁画であったとしたら、現在の形に仕立て直した人物は、大変な目利きでバツグンの美的センスを持った人物と言えるでしょう。他の作家が描いた本画の屏風で紙継ぎがズレている例もあるので、簡単には結論が出せないというのが現状です。

◆来て見て感じてください！

これだけ謎が多いのに、誰もが等伯の代表作と認め、国宝中のナンバー1に輝いたということは、この作品のすごさをよく表していると思います。

色々な謎を紹介しましたが、美術館では何よりも大事なのは、説明ではなく感じてもらうことだと思っています。能登（七尾）の原風景とも、等伯の心象風景とも言われる「松林図屏風」。その前に立ち、画面から溢れる空気や光と一体となって400年前の七尾にタイムスリップしてみてはいかがでしょうか。